

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2025年6月8日号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第9回仙台国際音楽コンクール 【開催日程】ヴァイオリン部門 2025.5.24 (土) ～ 6.8 (日) ピアノ部門 2025.6.14 (土) ～ 2025.6.29 (日)

第9回仙台国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門

ファイナル・セミファイナルレポート

音楽ジャーナリスト：正木 裕美

ヴァイオリン部門のファイナルは6月5日から7日まで開催され、セミファイナルで選ばれた6名（韓国・中国出身者、各3名）が各々2日間で2曲を演奏した。課題曲はモーツァルトの全協奏曲から1曲とロマン派を中心とした18曲から1曲を各自で選択。モーツァルトはイ長調 K219 が最も多く3名が選び、変ロ長調 K207 が2名、ニ長調 K218 が1名と続いた。



そのモーツァルトは今回全ラウンドで課されたが、審査が進み、編成が増えて形式が発展するにつれ、その難しさをひしひしと覚えることになった。音色や様式感、楽譜の分析、時代様式の考察、アンサンブルの意識——モーツァルトの音楽は奥深く、テクニックや感情だけでは表現できない。比較的、セミファイナル（カッサシオン K63 よりアダージョ）までは構成を見通し、陰影豊かな演奏も聴かれたように思うが、ファイナルの協奏曲ではモーツァルトらしさよりも奏者の個性がより際立ち、ブラームス風、あるいはテクニックを誇張したモーツァルトも聴かれるようになった。終了後の記者会見で堀正文審査副委員長が「モーツァルトはあれ？と思うものもあり（中略）時間をかけていないな、というのがわかる」と話していたが、偽らざる本音だろう。

一方で、いわゆる自由課題曲では、チャイコフスキー、ストラヴィンスキー、バルトーク、シベリウス、ブルッフとすべてのコンテストが自身の美点や音楽観を開花させ、のびのびとオーケストラとの協奏に没頭していた。本稿ではこれら2曲の演奏ほか、セミファイナルにおけるドヴォルザークとメンデルスゾーン（いずれかを選択）の様子も織り交ぜつつレポートする。

ファイナルの審査の結果、今回は第1位には該当者なし。最高位は第2位のムン・ボハ（韓国・19歳）が受賞した。モーツァルトの K207 とブルッフのスコットランド幻想曲を弾いたムンは、6名の中で最も両曲をバランス良くまとめていたように思う。ブルッフでは大きなフレーズをたおやかに一息で歌い込み、時に憂いや透明感を湛えた音色で滔々と奏でる。序盤のフルートとの鳥がついばむような掛け合いも調和的で、自身の内に音楽を取り込み、美しさが横溢していた。またモーツァルトは柔らかな音色で情感に富み、フレーズの対比や転調による色彩の変化を意識的に捉え、丁寧に弾き進めた。なお、セミファイナルではドヴォルザークの協奏曲を弾き、ミスはともかく、やはり構成をつぶさに捉え、ホルンや木管との掛け合いなど高いアンサンブル力を示した。終楽章における精彩に富んだ推進力も特筆したい。

裏面に続く



■お問い合わせ／公益財団法人 仙台市市民文化事業団 仙台国際音楽コンクール事務局

〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5 Tel:022-727-1872 Fax:022-727-1873 Email:info@simc.jp URL:https://simc.jp

第3位のジャン・アオジュ（中国・17歳）はチャイコフスキーとモーツァルトのK219を選択。チャイコフスキーは素早い運弓でキラのあるパッセージを響かせる一方で、第3楽章ではヴィブラートたっぷりに深く憂いを帯びた音色を奏でた。セミファイナルのメンデルスゾーンでは第3楽章を超高速で弾いてオーケストラとの齟齬も散見されたが、一転ファイナルでは協奏を意識し、修正力の高さも見られた。モーツァルトは軽快で各フレーズを端正に歌いつつ、細やかなデュナーミクを施していた。

第4位のリ・ジンジュ（中国・17歳）はファイナルでモーツァルトK218とシベリウスを、またセミファイナルではメンデルスゾーンを弾いたが、いずれも構成力とアンサンブルへの高い意識は群を抜いていた。例えば特定の楽器との主旋律、副旋律の掛け合いなどは意識的に響かせ合い、管弦楽の譜面にも意識が及んでいる。モーツァルトはややシャープな印象を持ったが、ハイフェッツの力強いカデンツァは彼女の美点が活きた。シベリウスは俊敏さと力強さが先行し、もっと悠然と飛翔しても良かったようにも思えるが、第3楽章では冒頭からテンションを保ったまま大きなフレーズを力強く弾き切り、持ち味が冴えた。

第5位のパク・ソヒョン（韓国・19歳）の選択はストラヴィンスキーとモーツァルトK219。ホルンやヴァイオリン（コンサートマスター）との掛け合いに見られる協奏の意識、瞬時の音色の使い分けなど、ストラヴィンスキーは作品の特性と自身の表現意欲がマッチした選択。セミファイナルのドヴォルザークでも同様の美点が生きていた。また第3楽章の鮮やかな2声部の弾き分けも印象深い。モーツァルトではヴィブラートや強弱の幅が大きく、アクセントやうねりを運び、様式感に欠けたか。その分、ストラヴィンスキー同様、自己の音楽表現への意欲が突出した。

第6位はキム・ハラム（韓国・27歳）とレイ・ハイルイ（中国・19歳）の2名。キムはモーツァルトK219とチャイコフスキーを選んだ。モーツァルトではヴィブラートを効かせて臆することなく情感を発露させ、第3楽章ではこってりとした歌い込みと行進曲の刻みを対比的に聴かせた。チャイコフスキーは時折大きな溜めと敏捷な駆走を組み合わせるスピード感を表出していた。セミファイナルのドヴォルザークではオーケストラとの密な対話や構成力も感じられたが、ファイナルの2曲はいずれも自己表現をより優先していたように思う。

同位のレイ・ハイルイはモーツァルトK207とバルトークの第2番。モーツァルトはミスやオーケストラとのずれが生じたことが悔やまれる。ただし、自身のパートのフレーズ間においては呼応や弾き分けが見られた。一方でバルトークは水を得た魚の様に生き生きと奏で、しなり、こすれ、ささやくような音色の移ろいも露わに、デュナーミクも的確。構成をしっかりとらえ、よく練られた印象を持った。オーケストラともしっかりと呼応し合えた。

なお、セミファイナル出場者から選ばれる審査委員奨励賞は的場 桃（日本・17歳）が受賞した。的場はメンデルスゾーンを弾いたが、特に第2楽章で示した色彩や抒情性の濃淡にセンスが感じられ、何よりもオーケストラとのアンサンブル力は突出していた。

また同ラウンドの聴衆賞は1日目＝キム・ハラム、2日目＝ヴィルモシュ・チコシュ（ベルギー／ハンガリー・28歳）、3日目＝的場 桃に贈られた。ヴィルモシュ・チコシュからは“テクニックとは披歴するものではなく作曲家の筆致を表現するためのもの”というスタンスが感じられる。音はやや小さめながら、音間を埋める豊かな音楽性と技術を持ち合わせ、メンデルスゾーンやモーツァルトのカッサシオンをニュアンス豊かに紡いだ。